

## 来賓のご挨拶



林 伸一郎

在モンゴル日本国大使館 参事官

まず、第12回日本語教育シンポジウムの開催を心からお祝い申し上げます。このシンポジウムの開催にご尽力されたバトジャルガル会長をはじめ、モンゴル日本語教師会の皆様に重ねて御礼申し上げますと共に、日本からお越し下さいました島田めぐみ先生にも深く感謝申し上げます。ありがとうございます。

私、前回も、つまり第11回日本語教育シンポジウムの時にも、こうして皆様に挨拶させていただきました。その時は、私が大学でモンゴル語を勉強し始めた頃、「日本語の『馬』という言葉がモンゴルにはないのだ」という話をいたしました。今日は、私が外務省に入省した頃の話をしたと思います。

モンゴルが民主化に移行し、日本とモンゴルとの外交が活発になって、モンゴルからも多くの要人がいらっしゃるようになりました。その内お一人の、モンゴルの要人が日本を訪問された時のお話をします。日本側の要人がそのモンゴルの要人に「日本国、モンゴル国、両国の関係が発展することを信じています。」と言いました。もちろん、ここにいらっしゃる皆さんは、これを訳せると思います。その時、日本側の通訳がこう訳しました。「ヤボン オルス、モンゴル オルス、ホユル オルシン ハリル ツァー フグジツヒイグ バト イトゲジ バイナ」。この時、モンゴル側の代表団の方たちは皆、首をかしげました。なぜだか分かりますよね？「私たちは今、モンゴルと日本の関係話を話しているのに、どうして『ロシア』が3回も出てくるのか」と。皆さん、ご承知の通り日本語には、R (P) と L (JI) の区別がありません。R しかないですよ。ですから、『Улс (国)』と言えない（正しく発音できない）日本人が「Орос、Орос (ロシア、ロシア)」と言ってしまって、モンゴル側をひどく驚かせた。モンゴル側がみんな

日本語教育と研究の繋がり  
-統計分析を例に-

首を傾げたものですから、その通訳はひどく落ち込みました。しかし、これをモンゴルの人たちは笑い話で終わらせませんでした。会談が終わった後、モンゴルの議長が通訳を呼んで、「自分が今まで海外の要人と話す時は、いつもロシア語だった。しかし今日、初めてモンゴル語で話をした。すごく嬉しかった。」これ、心に沁みますよね。その通訳は泣きそうになったそうです。

『言葉』と言うのは外交関係を支える大きなものだということはお分かりいただけると思います。もちろん、全世界の人が自由に英語を話せば、それでいいのかもしれませんが、なかなかそうはいきません。例えば、日本にある2つの国の大使館にそれぞれ10人の館員がいます。1つの大使館は10人の館員のうち日本語が話せる人が1人、もう一つの大使館は10人の館員のうち日本語が話せる人が8人いた場合、私はどちらの大使館に親近感を覚えるかと言うと、当然、10人のうち8人も日本語を話してくださる大使館の国のほうです。その国の政治やイデオロギーといったものを越えたところで、「ああ、この国はこんなにも日本のことを知ろうとしてくれている。言葉を通じて日本を理解してくれようとしている。」と思います。その努力に私たちはものすごく親近感を覚えます。今、モンゴルにある日本国大使館は全部で（日本人が）18人います。18人のうち、残念ながらモンゴル語が話せる人は3分の1。多いのでしょうか、少ないのでしょうか、6人います。ところが、東京にあるモンゴル大使館には正規の外交官が全部で8人いらっしゃるのですが、この8人とも日本語を話します。この状況を見て日本政府は「モンゴルは、こんなにも日本を大切にしてくれているんだ。」と思いますし、事実、そう思われています。

言葉と言うのは、確かに人と人との理解を深める上で大切なものですが、国と国との関係を支える上でも、とても大切なものだということを改めて思います。そして、その日本語を勉強してくださって、さらにその上、多くのモンゴルの方々に教えてくださっている日本語教師の皆様がこの場をお借りして心から深く感謝申し上げます。本当にどうもありがとうございます。

今日のシンポジウムを通じて、皆様の日本語に対する理解がより一層深まることを心から期待しています。ありがとうございました。